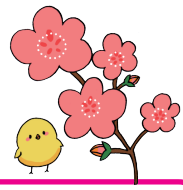
2023 年 2 回目のメッセージ
今月は鎌田實先生（諏訪中央病院名誉院長）のエッセイを一部共有させて頂きます。



「融通無碍（ゆうずうむげ）」のすすめ

融通無碍とは、１つの見方、考え方にとらわれることなく、
自由自在にものを見、考え方を変え、よりよく対処していくこと

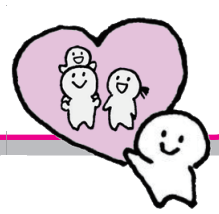
僕は結構、融通無碍な生き方をしてきたつもりです。
生い立ちは貧しかったけれども、それに負けたくなかった。いつも「どうしたら自分のやりたいようにできるか」を考えていました。中学校時代、僕は剣道をやっていましたが、特別の形を持たず、相手に柔軟に合わせていくスタイル。形にはまらない、いわば「無手勝流」でそれなりに強かったのです。

30 代で、諏訪中央病院の院長を任され、病院の今後を考えたときに「融通無碍な病院のあり方）を考えました。医療には「EBM」（エビデンス・ベイスト・メディスン）と言う言葉があります。「科学的根拠に基づいた医療」と言う大原則です。ですが、僕はそれを基本にしながらも、病院を融通無碍に運営していくことが大切だと考えました。

言い換えれば「融通が利く病院」、それが「NBM」（ナラティブ・ベイスト・メディスン）「患者さん自身の物語と対話する医療」です。患者さんの命を救うための医療体制を充実させるのは、当然で、一方で患者さんを全人的に支えるために、患者さんの心や魂のあり方を大切にしようという精神に基づきます。

僕は、病院でコンサートを開いたり患者さんと家族とが一緒に楽しくいられる空間や庭を設けたり、ボランティアや友人との絆を大切にしたり、また、ホスピスでの看取りのあり方の追求などにも力を注いできました。

ただ、自分の方針だけにガチっと固執しないように注意しました。職員の気持ちに耳を傾け、彼らが自然に患者さん目線になるようにと意識すると、やがてみんなが僕の考え方を理解してくれるようになりました。そして「諏訪中央病院は患者目線の温かい病院だ」と言う声が聞こえてくるようになりました。



鎌田先生のお考えにいつも、感動致します。
私も「ご利用者様のこれまで歩んでこられた歴史、物語（ナラティブ）を聞かせていただく、＜聞き書き＞を取り入れていきたいと思っています。具体的なやり方を示していくつもりです。

そして、スタッフ一人ひとりの物語も大切に関わらせていただきたいと思っています。
何でも話せる温かいてのひら訪問看護リハビリステーション、融通がきくステーションを目指して、みんなと協力しあいながらやっていきたい気持ちでいっぱいです。
今月も寒い中、お疲れ様でした。

2023 年 3 月 10 日　　呉静恵